

## 会 議 記 録

次の審議会（協議会）を下記のとおり開催したので報告します。

審議会等名称	第4回 近江八幡市西の湖廻遊路整備推進会議		
開催日時	令和4年3月23日（水） 14時00分～16時30分		
開催場所	近江八幡商工会議所2階 大ホール		
出席者 ※会長等◎ 副会長等○	別紙参照		
次回開催予定日	令和4年6月		
問い合わせ先	所属名・担当者名 総合政策部企画課 辻 電話番号 0748-36-5527 メールアドレス <a href="mailto:010202@city.omihachiman.lg.jp">010202@city.omihachiman.lg.jp</a>		
会議記録	発言記録・ <input type="checkbox"/> 要約	要約 した 理由	内容を整理して、わかりやすく記録として残すため
内容	別紙のとおり		

担当課⇒総務課

## ■ 1. 開会

事務局

本日は、高木委員、栄畑委員、中西委員から欠席の連絡をいただいている。  
また、中西委員の代理として、近江八幡商工会議所からは太田様に出席いただいている。

## ■ 2. あいさつ

座長

委員の皆様、そしてオブザーバーの皆様、多忙の中、参集いただき感謝する。  
これまでオンラインでしかお目にかかれなかったオブザーバーの皆様も、本日はここにこうして対面できたということで大変嬉しく思う。  
東京大学、京都大学、滋賀県立大学の学生の皆様には、西の湖を廻る新たな道の在り方について、非常に新鮮かつ独自性のある提案をプレゼンテーションしていただけたと思っているので、どうぞよろしくお願ひしたい。楽しみにしている。  
本日は、第4回ということで、西の湖を巡る路の在り方について、そして、基本方針の策定に向けて、学生の皆様の新鮮な視点もぜひ参考にしながら、これまで積み重ねてきた議論の経緯や蓄積も踏まえて、基本方針に向けての有意義な意見交換ができればと思う。

## ■ 3. 議事 ① 3大学による取組検討事項の発表

座長

それでは、議事に基づき進めてまいりたい。  
「議題① 3大学による取組検討事項の発表」ということで、まずは、東京大学の皆様から発表をお願いしたい。

東京大学

(要約)  
東京大学からは、取組の検討結果ということで、「ヨシ班」と「道の駅班」に分かれて発表があった。  
「ヨシ班」の提案では、ヨシ原の保全、それにつながる活用の仕方として、商品化を含めた「稼ぐ」をキーワードにした取組。そして、ヨシオーナー制度という関わり方で、自分ごととするということ。また、「道の駅班」の提案では、目的地を明確にするために、道の駅の整備、これは販売目的だけでなく、あくまでも西の湖の環境と深く関わり合うためのプラットフォームとする趣旨の提案であった。

委員

限られた期間でよく分析していただき、感謝申し上げる。質問ではないが、ヨシとの関わり方として、今までとは違う産業として再生できないかという提案だと理解した。  
また、ヨシ原のオーナー制度の提案も大変興味深かった。ヨシは生活と結びつ

いており、かつては一つの大きな財産だったと思うが、それが今は荒れ果ててしまい、整理をするにはコストがかかるという考えになっている。貴重かつ広大なヨシ群落の活かし方によっては、この地域の特徴を活かした実現性の高い提案だと感じた。

委員

私は、道の駅が良いと感じた。西の湖は、非常に自然環境が保全されており、貴重な財産である。私共も一度提案したが、自然環境を守るということはもちろん一番大切なことだが、やはり多くの方に来ていただくとなると、快適に楽しんでいただくための施設も必要だと思う。

ただ、やはり自然環境の保全についても非常に大事な地域であり、法的規制も厳しく、施設整備が難しい。そのため、それが出来る地域で、このような道の駅等を整備することは、非常に将来性があると思う。西の湖すてーしょんや安土B&G海洋センターとの連携という意味でも、興味深く聞かせていただいた。

委員

リサーチをもとにコンテンツを網羅していただいております、あともう少し、定量的な側面が更に出てくると良いと感じましたが、プログラムとしてしっかりまとめていただけたと思う。

皆さん 1人ずつに、簡単で結構だが聞きたいと思うことがある。ゲストの視点というものを、個人的に感じるところで構わないので、一言ずついただければありがたい。ゲストとして西の湖の魅力とは何かというところを、一言ずついただきたい。今回の滋賀県立大学、京都大学は、京滋地域ということで比較的近いというか馴染みのあるエリアだと思うが、首都圏から西の湖にやってきて、皆さんに提案するようなところ、コンタクトしていく意味や価値というものが、若者の視点で見た時に、何が魅力でありキラッと光ったのか。ここに訪れ関係を持つことの意味を、一言ずつで結構なので、コメントいただければありがたい。

学生

私が近江八幡の西の湖に来て感じたことは、「ヨシ原の文化的景観」という部分であり、ただワイルド（野生）というわけではなく、しっかりと人間が管理していて、奥深さがある。ヨシの歴史であったり自然の奥深さがとても魅力的で、これからのまちづくりの形に非常に生きてくる先進的な事例であり、地域なのではないかと感じた。

学生

私は、よしぶえロードをサイクリングすることが好きで、ヨシが風に揺れる音を聞きながらサイクリングすることが清々しくて好きである。サイクリングは若者っぽいので、より多くの人に知ってもらえたらと思う。

学生 先程のコメントにもあったが、単に自然が綺麗というだけではなく、それが人々の生活に関わっていて、かつての西の湖が生活の一部としてとても大切な場であったという歴史的な事実が良い点だと思った。それがもっと見える形になったらと思う。来訪者としても、きっと興味深い体験ができるのではないかと思う。

学生 今朝、西の湖の周りをサイクリングして回ってきたが、魅力的なスポットが非常に周りに散らばっており、バラエティーに富んでいると思う。  
例えば、円山のヨシが守られた景観であるとか、安土の常浜の辺りの水運の跡を残した歴史的な景観であるとか、西の湖すてーしょんの辺りの船がある光景であるとか、そうした色々な風景が散らばっていてバラエティーに富んでいることが魅力だと思う。

学生 私が初めて西の湖を訪れて感じたことは、琵琶湖などに比べると大きさは小さいかもしれないが、生活が近いということである。そこが、特徴・魅力だと感じ、言葉にはしづらいが、穏やかな気持ちになる。都会から来ると空気感が違うので、そういうところは訪れてみないと分からない。より多くの人に来てもらいたいと思う。

学生 他の5人がかなり言ってくれたので違うことを言うと、西の湖の魅力は、「西の湖を愛して守りたい」と思っている団体があり、地元の方がいることだと思う。私自身は、神奈川県横浜市の出身で、あまり地元でローカルな魅力であったり愛着を感じてはいないが、西の湖の周りで子供向けのイベントを開催したり、ヨシのイベントを開催したり、小さいながらも情熱を持って動いている方がいることが印象的であった。

座長 次に、京都大学の皆様に発表をお願いしたい。

京都大学 (要約)  
京都大学からは、「安土感動体験 ―地域の豊かな原体験の継承と、地域資源を活用した新たな文化の創造」と題したプランを提案。  
西の湖の課題について、一つ目は、住民それぞれが大事に思う原風景を次世代に継承すること、二つ目は、多くの人々にその魅力を深く知ってもらうこと、三つ目は、それらの活動を持続的なものとするために情報発信や体験交流プログラムを事業化して進めていくことだと整理。

その上で、西の湖すてーしょんや豊浦舟だまりの河川空間・水面利用による西の湖テラスの整備、西の湖ふれあいセンターや安土B&G海洋センターの積極的利活用による西の湖キャンプについて、提案があった。

座長 原風景を継承し知ってもらうこと、更に継承のための事業化ということで、特に西の湖テラスと西の湖キャンプについては、想定・関連する団体、業者、そうした方々からの聞き取りを基に、さまざまな可能性、非常にリアリティのある可能性について述べられた。事業化することを前提に、官民連携、多主体の連携について全面に出した、非常にリアリティのある提案をいただいたと思う。これに関してはいかがか。安土町商工会、それから商工会議所の方にコメントをお願いしたい。

委員 安土未来づくりアクションプランからということで、私に色々関わりがあるテーマを取り上げていただき嬉しく思っている。西の湖すてーしょん、豊浦港、安土B&G海洋センターなど、今拠点となり得るものを活かすこと。そして、なかなかアイデアがあってもできていなかったソフト面での提案が具体的になされ、こういうことが西の湖の何か所かの拠点で実現していけば、今までと違う水辺の空間ができ上がるのではと、大変興味深く聞いていた。

委員 既存の安土B&G海洋センターや西の湖すてーしょんを使うことで、本当にすぐ実現できそうな感じのイラストをつけていただき、本当に素晴らしい案だと思う。夢ではなく、短期的あるいは中長期的なところまで、事業主体も含めて検討し実現していけるような、かなり実現性のあるプランだと思う。

委員 先程の東京大学の発表では、より踏み込んで、全体像の整理を非常に丁寧にいただいた。京都大学の発表を聞いていると、聞いている私たちも、全体計画で何が必要かという部分が見えた上で、より実効的かつ実現可能なプランが見えたと思う。おそらく、これだけがポンと出てくると、咀嚼するのに結構時間がかかるのではないかと思うが、本日は流れを聞いていて、これがとんでもない提案ではなく、非常に地に足のついた実現可能な提案として見えた。提案についても、短期計画だとか中長期計画といった提案もあり、事業者のヒアリングもあったので、これを聞いているだけで、「あそこの地域のこういう事業者がやってきたら面白そうだな」といった、具体的な事業者のイメージもできると思った。

例えば、「新潟の方でこういうことが展開されていそうだな」とか、「長野でもこういう風景があるような気がする」だとか、西の湖にあったらワクワクするようなイメージを聞いているだけでも、イメージを描けるような提案であり、

ぜひ前に進めていくことができればと思う。

座長

事務局のどなたかいかがか。

かなり官民連携を視野に入れ、具体的な事業化にまで踏み込んで提案されたと思うが、何かコメントがあればいかがか。

委員

本日も素晴らしい提案に感謝申し上げたい。見ていて本当にワクワクするような提案であった。若者の観点からということで、我々が将来、子供たちに「こういうところに行きたいね」と言われ引っ張られていくことになるので、若者目線での提案は大変ありがたい。

当然、事業を進める際には、ここに書いてあるように取組の内容がまずあり、それから、どういう主体が関わってくるのかという部分があり、行政としては非常に関心があるところである。そして、スケジュールというところで、ハードには一定時間がかかり、ソフトはすぐ実現できるといった感じで、そういう整理もしていただいております、大変ありがたい提案である。ぜひとも参考にしながらやっていきたいと思う。

委員

一点だけ質問がある。

今回、事業者にサウンディングされたようだが、その辺りの情報をどの程度提出いただけるかは、色々と事業者側の事情もあり難しい部分があるかと思うが、ざっくり何社程度、どの辺りの地域でどういう事業者に聞き取りを行ったのか。また、今回の提案を踏まえたフィードバックもされているようであれば、それについての事業者の手応えというか、その辺りをフォローいただけるとありがたい。

学生

事業者については、だいたい8～10社程度にヒアリングを行い、主に水上のアクティビティを行っている事業者、レストラン等を営業されている事業者などにヒアリングを行った。最初の調査で活用できる資源が挙げられており、「資源を活用して実際にどういったことができるか」という提案をしていただく形でヒアリングを行った。その中で、「今ある資源の中で無理のない活用となると、こういうことができるのでは」といったアイデアを多く出していただき、そこから今回の提案をまとめた形になっている。

委員

おそらく、地元の事業者には、半分CSRのような形で、ジョイントベンチャーでも良いから地域活性化のためにひと肌脱ぐというような志で行動するケースもあると思う。ただ、今後の展開として期待したいのは、思いがけない業種・業態の事業者、あるいは外部、県外の事業者も参入したいと思わせるような部

分であり、PPPやPFIを考えるのであれば、ぜひその辺りの展望というか可能性の部分も探っていただけると良い。もちろんマーケティングの話も大事であるが、それだけではなく、色々なポテンシャルが事業者としてもあり得る点について、引き出しとて提示いただけると更に広がっていくように感じた。

学生

発表では、事業者の範囲についてはあまり言及していなかったが、滋賀で活動をしている事業者を中心に、関西圏で活動されている事業者にもヒアリングを行ったところ、やはり西の湖周辺について理解されているような団体からは具体的なアイデアが出てくる形であり、両者の意見を比較しながら検討を進めた形となっている。

座長

それでは、次に滋賀県立大学の皆様に発表をお願いしたい。

滋賀県立大学

(要約)

滋賀県立大学からは、「西の湖いいところ行っとこあみんちゅ大作戦」と題して、インタビュー形式で検討プランの提案があった。

西の湖全体の多様な関わりを増やすべきとし、西の湖の過去の営みを再生する8つのプロジェクトには、「あみんちゅシステム」を採用。「あみんちゅ」とは、プロジェクトを支える人物であり、そこには、金銭的・非金銭的の多様な形の援助が含まれる。

具体的には、西の湖の歴史から派生した産業や自然維持から発展した産業の観点から、「廃棄物」「ヨシ」「野鳥」「サイクリング」「畜産」「真珠」「農業」「水遊び」の8つをテーマに掲げた。例えば、サイクリングについては、西の湖ロードや外観にヨシを利用したサイクルパークの設置、真珠については、自ら琵琶パールに核を入れ3年後に取り出す体験や西の湖周辺における販売所の設置、農業については、西の湖周辺で栽培した農作物を提供する湖上レストランといった、具体的な提案があった。

委員

どの大学の発表も感心するものであり、滋賀県立大学については、農業、畜産、真珠など、この地域で非常に可能性が高い産業について、個々の企業の活動というよりも、産業として大きく捉えており、興味深かった。

個々のデータやイラストについても個性的なものが多く、説得力があった。鳥瞰図のような上から見た手書きのイラストについても、観光、水上といったシーンごとに分かりやすく作られており、イメージしやすかった。

委員

非常に多岐にわたる提案であった。聞いていて、本当に夢のある提案だと思った。西の湖が、30年後や50年後に近江八幡の中心になっているような、本当

に素晴らしい提案だったと思う。提案については、非常に多岐にわたる内容であり、かなり地道な調査があり検討があり、本当に努力していただいたというのが分かった。

非常に面白いと思ったのは、畜産である。放牧をして観光に使うという発想は、あまりなかったように思う。調整や採算など、実現するには少し時間かかるかと思うが、非常に面白いアイデアだと思う。

委員

緻密なデータをもとに具体的な取組を描いていただき、やはり色々な人に伝えるにはイメージの共有が大事だと思った。皆さんの整理が本当に素晴らしく、「こうしたら人が来てくれるのではないか」といった整理に基づき発表いただき、色々な人と共有するにあたって良い提案だと思った。

オブザーバー

滋賀県立大学の皆さんについては、色々な分野にまたがっており、さまざまな課題を一つずつ理解するのはなかなか難しいところを、「あみんちゅ」を軸にそれらをうまくつなげ、経済循環システムを作るというアプローチが素晴らしいと思った。アイデアを一つずつ見ても、懐かしさと先端技術がうまく掛け合わされ、伝統的に見えるがそれだけではなく、今の時代に相応しい新しさがあると思った。

8つのテーマを示していただいているが、色々なアイデアの中に色々なヒントがある。例えば、ヨシのシステムが建物に反映していたり、水草などの西の湖の土壌・水質管理、あるいは農業など、色々な施策がそれぞれ独立しているのではなく、相互に関わっているイメージが伝わった。この短時間で、議論してここまで統一感のあるプランがよくできたと思いながら、感心して聞いていた。

また、東京大学の皆さんについては、問題設定やアプローチについて、非常に核心をついていた。

各チームの色々な考え方は、それぞれが矛盾するものではなく、大きな方向性で共通していると感じた。決して奇をてらったものや現実離れしたものではなく、考え方の芯がしっかりしているので、うまくこれらを組み合わせて将来のビジョンが描けると良いと思った。

ビジョンを描いたことによって、本当に関りたいと思った人が出てきて、そこから徐々に作っていくことができると、西の湖のまちづくりは進んでいくのではないかと、非常に力強く思った。

<休憩>

### ■ 3. 議事 ② 基本方針策定に向けて

座長

続いて、「議題② 基本方針の作成に向けて」、検討を進めてまいりたい。  
近江八幡市のホームページにおいて、過去3回の会議の議事録やグラフィックレコーディングを公開している。本日については、先程、3大学の皆様から、非常に貴重で有意義で創造的で、リアリティのあるものから大きな夢のある話まで、様々な提案をいただいたところである。この推進会議で基本方針をまとめるにあたって、本日は、そこに向けた最後の意見出しということで、ぜひ皆様から意見をいただければと思う。

委員

東京大学の発表の際に、「個人として、ゲストとして訪れたとしたら、どういった魅力が西の湖にありますか」という質問をしたが、皆さん色々な感じ方をさせていただいており、良かったと思った。

特に印象に残ったのは、何か穏やかな気持ちになるような空気感を感じるという部分や、サイクリングをして風の音とか空気を感じる感覚という部分であった。これらを共有できると、まさに西の湖の空気感というか、あの心持ちというか、そうしたところを共有できることこそが、大事な視点であると感じた。実際に、色々な形での技術連携や取組という点では、本日提案いただいた中でできるだけ実現していくことが、理想形だと思う。その上で、空気感というものを皆で共有していくことが大事だと思う。

今後の基本方針や取組に向けて話しておきたいことがある。

先日、他市の都市再生協議会有り、そこでウォークブル事業についての議論があった。ご承知のように、都市再生特別措置法の関連で都市再生協議会が設置されているが、近江八幡の場合は、立地適正化計画を作った時に、都市再生協議会は設置せず、立地適正化計画の策定委員会を作っておしまいという形であった。

これは他市の議論であるが、ウォークブル事業に関連して都市再生協議会に関する議論もさせていただき、ご存知のように、国交省に限らず国の事業では、必ず、「計画やビジョンを作るように」となっており、「ハード事業の補助金だけを渡すようなことは絶対しませんよ」となっている。必ず、ビジョンや計画が必要となり、もう一つはエリアプラットフォームである。関係する自治体と産官学民がどういう形で関わり得るのか、作った後にどのように維持をして運営していくのか。「それがセットでないと他の補助金を出しませんよ」という点は、皆さんが承知しているように大前提となっている。

今回、西の湖を取り巻いて、特に行政は、色々な補助金やその他の予算も確保しながら、ハード事業を中心に事業展開していくと思う。それを期待している

が、今述べたように、産官学民がどういう形で連携するプラットフォームを作っているのか。そして、作った後にどう持続的に展開しているのか。更に、それが大きな西の湖というスケールでのビジョン、個別のプロジェクトでのビジョン、そういったものとどのように連動しながら展開していくのか。その部分は、非常に大事になってくる。

今の話は、国からの、つまり外圧からの話となるが、それに限らず、単に事業を達成するというだけではなく、その関係主体、プラットフォームをどのように作っていくのか。そしてビジョンをどのように広げ、つなげていくのか。そのあたりを、今後の西の湖の展開でも期待しており、まさしくそういう素地が、これまでの推進会議の中や本日の成果としても出てきたのではないかと感じている。今後の更なる展開を期待したいと思っている。

座長 大事にしたい「空気感」というキーワードと、あとは、進行管理のための「多主体の連携、組織化」というキーワードをいただいた。

委員 資料5では、これまでの会議における主要な発言内容など事務局の方でまとめていただけており、先程の休憩時間でも見ていた。

本日の発表も踏まえ、方針のところで言うと、一つは、他の委員もおっしゃったようにビジョンをどうするか。これに関しては、これまでの発言内容から、「守り、活かす」というのが、まず大きなキーワードになっていると強く感じている。なぜ「守り、活かす」なのか。滋賀県、あるいは日本として見ても、西の湖という場所は、重要文化的景観の第1号でもあるように、自然資産として、地域資産として、これほど素晴らしいものはないのでは、という考え方を大前提に考えたい。「守って、活かす」という視点は、今まで何度も意見が出ており、これだけは絶対ぶれてはいけない軸である。この文化的景観を守り活かすということを、安土だけではなく、八幡だけではなく、皆でやっていきましょう。ここだけは絶対ぶれてはいけないと、改めてこれまでの議事内容などを見ていて確認した。

先程まで学生の発表を聞いて、感想を言えなかったもので、少しだけ補足したい。3大学の発表について、本当に良い内容であり、これが聞けただけでも、今回来て良かったと思った。

まず、東京大学の発表は、学生がまとめている資料として、今後もこの西の湖に関する会議をしていく上で基本となる資料として、ぜひ使ってほしい。それ程、ロジックの整った資料だと思う。これまでの会議において、何が課題で、何ができそうか、既にだいたい網羅されていると思う。色々な団体が発言して

いるが、すっきり通ったロジックで示してくれたのが今回の資料だと思う。ヨシに関する関係人口でいうと、大きな枠として、目標に向かって、アート、ビジネス、経済など、色々な視点から広く提案をまとめており、これだけ細かく設定できるというのが本当に素晴らしい。また、このメンバーはほとんど近江八幡に来ていないので、勉強して頑張ってまとめてくれたことを踏まえると、本当に良い資料である。

2つ目の京都大学は、長年にわたりずっとフィールドに出た上で、安土の方々とも何度も対話して出された提案であり、思いつきで出た提案ではなく実行力のある、本当に形にできる提案だと感じた。他の提案よりも、遥かに説得力のあるものだと感じている。これに関しては、官民が連携し、戦略的な形になるように前に進めてほしいと思う。住民とも対話しながら進めていくことで、必ず良いものになるのではと感じている。

3つ目の県立大学に関しては、今までの議論の中で一番皆さんの弱かった、西の湖を俯瞰した広域的な視点、更には長期的な時間軸で考えられていた。2050年というシナリオプランニングの資料があったと思うが、非常に長い軸での視点であり、よく専門分野のみ考えがちなところ、領域横断的に色々なアイデアを提案していただき、そういう意味で、考え方の枠組みを取っ払った上でアイデアをいただけたと思う。こうした提案をもらえることだけでも非常に価値があり、私自身も近江八幡に10年以上関わっているが、関係性や価値観が固定化されていると気づかされた。

学生たちの提案により、本日のこの場だけでも新しい視点をいただき、西の湖という場だからこそできるテーマだと思った。「近江八幡を良くしよう」という切り口では、ここまで鋭い角度での意見交換はできない。西の湖という明確で分かりやすい地域資源、若い世代とも対話ができるということは非常に有用だと思う。若い世代と地域の人たちと、もっと言うとステークホルダーと対話できるような場を今後も作っていくべきではないかと思う。そして、もちろん軸になるのは、「守り、活かす」というところだと思うので、やはり対話をしていく場は、別途考えても良いと思った。

座長

3大学のプレゼンテーションは、視点も視座も異なり、それぞれ色が違った。そうしたところも非常に参考になるものであり、基本方針に積極的に取り込んでもいいのではないかという話であった。

委員

これまでの議論と本日の発表を聞かせていただき、ワードとしては、西の湖の豊かな自然であり、ヨシ、そして、原風景あるいは観光。本日も、「エシカル」という言葉も出していただき、こうしたところが一つのベースになってくるのではと感じている。また、関わりとしては、地元である西の湖周辺の方々は当然のことながら、そこに市内以外、県外含めて関わる人を増やしていくということも、ワードとして非常に印象に残った部分である。

本日の発表を聞くと、色々な部分に取り組んでいくには、行政だけでなく、当然大学もだが、やはり民間企業の参画という部分がどうしても必要になってくると思った。コンセプトをしっかりと理解いただいた企業にしっかりと参画いただくことで、良いものになっていくのではないかと感じた。

座長

「人を増やす」「関わりを増やす」、特に「民間企業の参画」ということをキーワードとしていただいた。

委員

産業経済部ということで農業関係を担当しており、滋賀県立大学の発表の中では、色々な農業の話もあった。行政職員としては、こういった話を聞くと、勝手にできる・できないの判断を下してしまう癖があるが、若い世代の発想を聞くことができ、本日は感謝である。

第1回の会議の時に、西の湖をぐるっと一周、徒歩はなかなか難しいと思うが、サイクリングなり車なりでということをお話させていただいたが、サイクリングが一番適当であり、時間をかけてゆっくり回ることができて良いと思う。ただ、ずっと走るだけではなかなか大変ということで、何か所か立ち止まるようなポイントが必要ではないかという気がした。そういう場所ができると、回りながらの楽しみも出てくるもので、行ってみようかという気になるのではと思った。

そのほか、また行政的な話になるが、農業関係で言うと、規制や補助金獲得など、それらはハードルが高いという中で、道の駅であれば農業も道路も上下水道も関係があり、色々解決していかなければならない課題があると思う。ただ、若い世代の発想というのは非常に大事であり、ぜひ3大学の中から近江八幡市役所に就職していただける方が、各大学1人ずつくらいいると嬉しいと思った。

座長

「ぐるっと一周」に加え、「立ち止まるポイント」が重要だというキーワードをいただいた。

委員

3大学の皆さん、改めて発表に感謝を申し上げたい。若い学生の視点で発表いただき、また、それぞれ立場の違う関わり方をしていただいたことで、多様な提案がいただけたと思っている。加えて、これまでの推進会議の中で色々と発

表いただいた商工会や商工会議所の方、滋賀県立大学から取組紹介もしていただき、提案内容や課題、アイデアといった材料が揃ってきたと思っている。

行政で計画や方針を作る時は、まずは基本的な大きなコンセプトがあり、そこにぶら下げるどういう施策をやっていくか。それをどういう組織や推進体制で実施し、PDCAをどのように回していくかという話になる。大きな部分としては、先程から話にあったように、「守り、活かす」というビジョンであり、これは西の湖に限らず普遍的な理念でもあり、西の湖での取組に加え、外にも発信していくという意味でも良いのではと思っている。

具体的な施策については、皆さんの色々なアイデアを組み合わせていき、今後この会議で練っていく。推進体制という部分も、計画によっては最後に少し書いてある場合もあり、西の湖の取組は多様な主体が関わるということ、これをどのように動かしていくかということも重視した方がいいのではと思っている。

座長 「全体を俯瞰する視点」「理念としての視点」、具体の策ということで、特に「基本方針のフレームになる部分」について、キーワードをいただいた。

委員 「安土未来づくり課」という課を所管している。安土町と近江八幡市が合併して、この3月で12年が経つ。合併においては、西の湖が一つのキーワードであり、安土側から言うと、西の湖が観光の玄関口になると思っている。安土城が令和8年に築城450年を迎えることもあり、県の方でもそういった取組をしていただいております、安土城下の計画を立てるような話もある。市の方でも、城下の計画を立てており、京都大学の先生にお願いし、その手伝いをしてもらっている。

計画ができることで、このことを発端に安土の未来づくりの計画ができると思っている。計画の推進によって、安土の未来づくり、ひいては近江八幡市のまちづくりにもつながるのではと思っている。

座長 西の湖をめぐるこの基本方針だが、やはりこれは、まち作りとの関連性・連携性が必要ということで、「まち作りとの関連性・連携性」をキーワードとしていただいた。

委員 東京大学は、イベントやフェス、エシカル消費といったワードでまとめていただき、京都大学は、地域の事業者との連携ということで、重点的にヒアリングもしていただき、非常に嬉しく思った。滋賀県立大学からは、環境保全を大前提に、色々なプロジェクトを提案していただいた。環境保全を大前提とする点

は良いと思う。その上で、地域の事業者との連携もしていくということであった。

近江八幡商工会議所でも、最近ではコロナ禍の影響があり、地域の事業者は非常に苦しい状況にあるが、一方で、「何か新しい商売を始めてみよう」「何か違うことにチャレンジしてみたい」といった相談も非常にたくさんある。そうした意欲を持つ方々が、地域にはたくさんいる。そうした方々と西の湖でのプロジェクトを組み合わせることで、地域の方と連携して行くことができればと思う。学生の発表にもあったが、例えば、夜の西の湖など、夜でも楽しめるような、一日を通してずっと楽しんでいただけるようにできればと思う。

2019年に、近江八幡商工会議所で、ジャンカルロ・ダッラーラ会長が講演されたことがあり、そこで、イタリアの「アルベルゴ・ディフーズ」という取組を紹介いただいた。「アルベルゴ・ディフーズ」という取組は、ホテルに宿泊して終わりではなく、街中の一角でチェックインをし、その後、街中で色々な食事を楽しんだり色々な交流をしたり、街中を回ってその地域で一日楽しんでいただくものである。今、近江八幡では、道の駅的な施設が少なく、それは課題ではあるが、一方で、観光客として扱われないことに本物の魅力を感じる方もたくさんいる。いわゆる観光向けみたいな施設だけではなく、地域で活動しているお店を利用していただくことで、魅力が出せないかと思っている。旅行でも何でも、これを言ったらすぐ良くなるというものはないが、まずはやってみて、そこから色々と修正していきながら良いものにしていければと思う。

今、近江八幡商工会議所では、だいたい1200以上のお店の方が会員となり、色々な相談がある。「地域でこの時期に活動していきたい」「遠方から近江八幡に来ただけけれど、地域ともっとつながりを作りたい」「何かやってみたい」など、そういった希望を持つ方は本当にたくさんいる。地域の皆さんと連携しながら事業を進められるような環境作りができれば良いと、今回の話を聞いて非常に感じた。

座長

「西の湖を巡る」「つながりを作る」、そのために、例えば、「体験できる」「できるだけ長い時間そこに留まる・滞在する」ということをキーワードとしていただいた。

委員

近江八幡市が安土町と合併して1年後ぐらいに、四者連携会議が発足した。今のこのメンバーとだいたい同じであり、その時に、西の湖の活用ということで色々議論がされた。その時の報告書を読んでいると、今回の会議と内容的には重なるところもあるが、この会議の議論の方がかなり実現可能性があり、非常に面白いアイデアがたくさんあると思う。

本日、3大学から提案いただいた内容も含め、今回の「西の湖廻遊路整備推進会議」は非常に素晴らしい名前がついており、ビジョンで終わらずに、何か実現をしていただきたい。そういうものに結びつくような基本方針を作っていただきたい。

座長            こういう会議というのは、得てして絵に描いた餅で終わりにすることが多いが、そうではなく、やはり何か具体的な、これからこの基本方針が基になって走り出す具体的な策というか、プロジェクトが必要であるという重要な指摘をいただいた。

委員            ホワイトボードに西の湖を中心としたイラストを描いていただいている。今回は、西の湖が真ん中にあるが、例えば、もう少し左側に視点をずらすと八幡堀があり、八幡山城がある。西の湖の右側には、安土城跡があり、周辺には堀がある。そして、下の方に視点をずらすと近江八幡駅と安土駅、2つのJRの駅がある。こうして視界を広げると、そういう地形・地勢となる。今回は、西の湖廻遊路整備推進ということで、西の湖の本体、その内部、水辺ということだが、少し視点を広げると、今言った地域の玄関口や観光ルートに必要な視点も含まれてくると思う。それは西の湖を中心として水路でつながっているという点で、西の湖をキーワードとした地域振興につながると思う。  
第2回の会議の時に、商工会が関わりビジョンとして掲げている「湖川の街道プロジェクト」というものも紹介しており、西の湖の本体とは少しずれているように見えるが、安土城のふもとで活動している和船について紹介したと思う。今回発表いただいたのは、これからの未来に向けて実現したいことだが、既に実践していることも含めながら、基本方針の策定というものが、どこかで「湖川の街道プロジェクト」にも触れられると、現実的な動きも含めることができ、良いと思った。

座長            西の湖の視点・視野をもう少し広げて見えてくる「地域のそれぞれの場所とのつながり」「交通の要素とのつながり」、それらにも目を配るというキーワードをいただいた。

オブザーバー   基本方針を考える上で重要だと思うことは、西の湖全体の話と拠点の話とを、いかに相互に関係づけていくかだと思っている。本日色々な意見があったが、皆さん、西の湖全体の循環をいかにつくるか、様々な主体の様々な活動をいかに一つにまとめていくかという大きな話をしていただいた。これはコンセプトとして非常に重要な柱になると思う。

全体の話も、実際に何かを動かすとなると、例えば、公共施設の利活用など、拠点から考えるのがやりやすい。拠点の活動をうまく全体につなげていくのが大事。また、拠点の活動は拠点だけで閉じて考えるのではなく、西の湖全体を動かすエンジンにするという考え方が非常に重要だと思っている。

つまり、二段構えの構成というか、トータルのコンセプトとして「全体の循環」と「拠点の活用」、これらをいかに実現するかである。本日欠席だが、安土町商工会の高木さんとお話をさせていただいた時に、ボランティアベースの限界について話があった。「なかなか中だけではしんどい。きちんと外の力も必要。では、どういった中と外の関係性を作っていくのか。」という視点が重要になってくる。例えば、京都大学の提案は、まさに拠点を中心に事業として成り立たせ、その上で、全体に波及するような方法をつくるというものだったが、この二段構えが非常に重要だと思う。

基本的に、民間事業者は民間事業として成り立つことが必要不可欠であるが、全体への波及との両方、全体と拠点をどのように作っていくのか、これが本当に大事で、十分に議論を重ねていく必要がある。先程、轟先生からプラットフォームとエリアビジョンの話があったが、これらも同様に二段構成が必要ではないかと思っている。プラットフォームで言うと、ベースになるのは大きな全体協議会であり、ネットワーク型の組織である。大きなプラットフォームを作りさまざまな活動を連携・管理する一方で、民間側が積極的・自主的に活動を推進できるようになることが必要。その2つをいかに作っていくかが重要である。

京都大学の学生が色々ヒアリングをされていたところに私もついて行き話を伺ったが、施設の現状を考えると、施設だけだとなかなか活用を成り立たせるのが難しく、西の湖と施設を両方セットで使うことにより事業性が成り立ってくるといった話は聞いていた。

そういう意味で、例えばアウトドアで事業性を成り立たせる事が考えられる。琵琶湖は、夏は綺麗であり遊べるが、冬場はなかなか遊べない。その点、西の湖であれば冬でも環境学習と合わせてプログラムを組めるなど、特色ある事業化ができるという話も伺った。それと飲食をうまく組み合わせたり、また、西の湖に関わる色々な方々と関わられるような交流拠点を作り、それらをうまく組み合わせることもできるのではないかと思う。また、環境学習だけではなく、安土の歴史、安土の観光にもつなげ、近江八幡のラ コリーナに来た方も訪れる。そのようにうまく連携していけるようなイメージ、統一感や連続性を持たせることができれば、本当に良いのではないかと思う。

全体と拠点のコンセプトとイメージを最初がっちりとつくりこんで、その通り実現するのは難しい。どういった手順でどういったプロセスで進めるのが

重要であるが、一つの考え方としては、全体のコンセプトを「ある程度」決め、それを踏まえた上で、スモールアクションとして「できることから」一つずつ始めるのがよい。5年、10年のスパンでも、「まずはここからやってみよう」というところから始め、その上で全体コンセプトを修正しながら走り続けるというのが現実的だと思う。ゆるやかなコンセプトのもと、柔軟さをもって、全体のバランスと、事業推進のエンジンをうまくつなげ続けるということが重要だと思う。

逆に言えば、最初から協議会の中で全てを盛り込み、一気に動かそうとするとガチガチになって、なかなか動けなくなってしまう恐れがある。そうならないように、そのあたりを柔軟な二段構成にして、「まずは一つやってみよう」ということが見つければ、前に進んでいくと思う。非常に期待しているので、今後ともよろしくお願ひしたい。

座長

まず、全体コンセプトとして、「多主体を一つにまとめるような大きなプラットフォームの存在が必要」という話。そして、「具体的に進めるためには明確な拠点と二段構成が必要であり、それらをしっかりと連携させる」という視点をいただいた。まさに基本方針となるようなまとめであり、感謝したい。

そして、もう一つ重要な点は、「ガチガチに固めるのではなく、柔軟にそのときの追い風などを参考にしながら対応していくことが大事である」という話もいただいた。

オブザーバー

この会議は、去年の夏から参加させていただいている。我々は色々な会議に参加させてもらうが、こんな楽しい会議はないと思っている。

本日がピークというか、皆さんの考え方を聞かせていただき、本当に夢のある楽しい会議であった。我々の立場としては、西の湖が一級河川であり県が管理する立場であるということ、また、周りのサイクリングロード「よしぶえロード」が県道ということで、県が管理しているということがある。先程の発表の中にあつた道の駅をもし実現していくのであれば、色々なところで県が関わっていくことになる。これまで、こうした河川や道路のにぎわいに係る県の取組については、滋賀県も含め進んでいなかった。

個人的には、西の湖だけではなく、こうした取組を進めていただき、それを我々がしっかり支援していきたい。県としても、課題の部分については専門部会も作っていただき関わらせてもらっている。我々も関わりをしっかりと持ち、この計画については、まずは基本方針の策定、そして今後具体的なプランの策定ということになると思うので、しっかりと関わり、できることをやらせていただくということを宣言させていただき、本日のまとめとしたい。

座長

大きなプラットフォームということはもちろん、プラットフォームというのはインフラストラクチャー、つまり基盤であり、特に西の湖を巡る物理的な基盤としてのサイクリングロード、これはもう基本中の基本ということで、これを支えていただくという心強い話に感謝したい。

皆様より意見をいただいたが、一つ補足として述べさせていただくと、皆様にいただいた内容は、全体のプラットフォームに関わる話、西の湖を守り活かすという話、より広域に広げまちづくりにも浸透させていく、あるいはその関わりを増やすという話、具体と総論全体の話ときちんとリンクをさせるといった話であったと思う。

私がそこに一つ付け加えたいと思っているのが、この西の湖の存在は何なんだろうと。日本において、あるいは世界において、地球上において、西の湖という存在は温かい唯一無二の存在であり、日本最大の淡水湖において最大の現存する内湖であり、歴史文化が非常に深く、人との深いつながりや関わりが脈々とつながっている。

本日のプレゼンテーションにおいて、ゲストとしての視点で重要なキーワードがあり、確か「ディープ=深い」という話があった。これまであまり関わりを持っていなかった方が西の湖を知ると、「深いな」「ディープだな」と思うこと、これは大きな発見ではないか。西の湖の発信力の強さに、改めて気づかされた。そういう意味では、これからの世の中は、どちらかというところ、分散型・自律型の人のつながり、社会になっていくのではないか。西の湖も、そもそも色々な主体の方々色々なところで色々な取組を既に行っている。西の湖も、分散型・自律型の色々な取組のメッカになっている。これを大きなプラットフォームとして、積極的に外部に向けて発信していただくだけでも、具体的な拠点を作った時に、そこに対する意識の集中度が違うのではないか。

また、東京大学のプレゼンテーションでキーワードとして「稼ぐ」という話があったと思うが、この稼ぐことを近代的に解釈すると、あくまでも地域の中で回っていくお金を増やすということに視点が行ってしまうが、おそらくこれからは、それだけが稼ぐということではなく、「何を稼ぐのか」になる。例えばファンの数を増やすことも稼ぐことであり、SNSの「いいね！」を1から10、100、10,000に増やすことも稼ぐことになる。

関わりを増やす、ファンを増やすということも含めた大きな意味での稼ぐということ、この基本方針に盛り込んでいくということも必要ではないかと、改めて気づかされた。

委員

事務局については、色々リクエストが多い中、対応いただき、本当に感謝する。この会議は、会議資料や議事録をホームページに掲載していただき、でき

るだけ情報を公開して進めていただいていると思う。先程も話があったが、絵に描いた餅にならないように実際に実現していくことも大事だが、絵を掲げることも非常に大事なことだと思う。ぜひ、3大学の動画だけではなく、この資料も掲載するというので、もし仕上げきれしていないチームがあれば、最終的に仕上げていただきたいと思う。

実務的な話で恐縮だが、写真など何処かから引用しているものは、掲載にあたって必ず引用元を掲載する必要がある、また、オリジナルの写真や図に関しては、制作者の名前をきちんとクレジットとして入れた方が良い。滋賀県立大学は、オンラインの可能性を踏まえて個人名を出していないが、個人名はきちんとクレジットしていただき、誰が作った図・絵なのか、良くも悪くも責任が出てくると思うので、クレジットや引用をはっきりとさせた上で、これらの絵を掲げ、皆で共有しながら次のステージに向かうことが大事だと思う。

座長

本日の議事内容については、グラフィックレコーディングでまとめていただいたので、少し振り返りをお願いしたい。

オブザーバー

オブザーバーとして参加させていただき、第1回から、グラフィックレコードと言われる手法でこの会議の様子を記録させていただいた。今回は、第4回ということで、早速まとめさせていただきたい。本日の3大学の発表は、非常に面白く聞かせていただいた。

まず、東京大学からは、ヨシに魅力を感じ、そこを詳しく掘り下げていくと、やはり生活と近く、人が管理した文化的景観であり、そういった空気感こそが魅力との話であった。

そのヨシを守っていくためには色々な段階があり、まずはヨシを知るところから。そして、ヨシフェスなど、ヨシとアートを掛け合わせてイベントをする、それを継続させる。そしてヨシを管理・保全しなければならないということで、ヨシのオーナー制度を導入し、ヨシの管理問題、手入れにコストがかかるという部分を解決していこうと。更には、稼げるヨシにしていこうと。「エシカル」というキーワードもあり、それらを掛け合わせて、ヨシで稼げる産業にしていこうという話であった。

次に、京都大学からは、より具体的に、エリアを絞った提案をしていただいた。地元の活動団体の方とのヒアリングに基づき、非常に実現的で具体的な提案を出していただいた。

具体的には、西の湖すてーしょんや西の湖キャンプにおいて、どういったことができるか。例えば、水辺の空間の利用で、デッキを作ったりであるとか、舟

だまりでのキッチンカーであるとか、カフェを設置するとか。そのほか、キャンプ場や最近流行っているグランピングなど、民間と協力しながらやっという。

最後、滋賀県立大学からは、かなり包括的で広範囲な8つのテーマから提案いただいた。

「あみんちゅシステム」ということで、西の湖に非常に思い入れがあり出資してくれるような協力者を「あみんちゅ」と捉え、「廃棄物」「ヨシ」「野鳥」「サイクリング」「農業」「放牧」「水遊び」「パール」というテーマで提案をしていた。

このように描いてみると、キーワードは違えども、結構、似通っていることに気づいた。意外だったのは、外部から来た場合、分かりやすい観光地ではなく、ヨシが管理されたような原風景、穏やかな雰囲気や空気感みたいなものに魅力を感じていることであった。これは、現地の住民の方と認識に差異があるのではないか。分かりやすい観光地を作り人をたくさん呼ぶのではなく、実は、外部の人はこういうところに魅力を感じていると分かった。

現地の声を聞いた上でのアイデアの中にも、西の湖の自然を活用するという視点はもちろんあるが、キャンプ場とかキッチンカー、カフェを作ろうという視点と、実はこういう原風景的なところにも、西の湖の魅力を感じる人が外部にはたくさんいると分かった。しかも、若い世代が魅力を感じるどころが結構ある。例えば、「滋賀県立大学のヨシに関する提案とヨシフェスやヨシマルシェは結構つながりそうだね」や、ヨシのオーナー制度について、「そのオーナーは、もはやあみんちゅじゃないか」など。これらのアイデアをうまくまとめれば、非常に良いものができるのではないか。

3大学の発表を踏まえて、この意見出しを行ったが、やはり重要になってくるのが「プラットフォーム」というキーワードである。3大学の提案にもあったが、現在、団体がばらばらに活動しており、お互い何をしているのか分かっていなかったり、イベントを開催しても、「そういうイベントもあったんですね」といったこともある。

滋賀県立大学については、自身の所属大学ということもあり、学生の皆さんがまとめていく様子を見ていたが、調べれば調べるほど、名前が挙がるこの人々は本当につながっているのか、そういったところが見えなかった。また、京都大学の発表でも、「プラットフォームがないので作ったらどうか」とあり、その重要性が再確認された。

では、「どのように作っていくのか」だが、キーワードは「守り、活かす」ではないかと思う。これを魅力に感じている方が、外部にいるということである。原風景を守り活かすことは、環境保全が大前提になってくる。プラットフォームなので、多様な活動主体が関わってくる。そこには、学生の目線が必要で、そこに地域の成功例が加わり、なおかつ、先程も話にあったように、色々な管理主体があるため、県、市あるいは外部の民間の方にも関わっていただくことが必要である。こういった対話の場が必要であり、それがプラットフォームという話であった。

オブザーバーの話にあったが、プラットフォームと言っても、全体を総括するプラットフォームと、その拠点が重要だと話があった。学生の提案にも、拠点になり得るようなテーマが結構あった。「水上に何かを作る」という点が共通したテーマであり、新しい拠点になり得るように感じた。合併したお互いの町をつなぐものとして、この西の湖が一つのシンボルになり得るだろうと。学生がこうした提案をしており、実際、コロナ禍を経て、「何か地域に貢献したい」「新しいことを何かやりたい」という人もいるわけである。

それらを、どのようにマッチングするか。プラットフォームとなると、やはり全体のビジョンが必要であり、産官学民、県内外、市内外、日本全国の色々なところから、いわゆる「あみんちゅ」を集めることが重要となる。何よりも、この会議で話し合ったことをビジョンのままに終わらせないようにしよう。実現可能なところから具体策を提示し実現していこうということが、最終的なまとめだと思う。

座長

まとめていただき感謝する。ほかに意見等がなければ本日の会議は以上とし、事務局からの連絡事項をお願いしたい。

#### ■ 4. 閉会

事務局

次回の第5回会議については、本日の議論の内容を踏まえ、答申に向けた内容について審議を進めてまいりたい。開催時期については、6月頃を予定している。後日、日程調整をさせていただくので、参集の程よろしくをお願いしたい。本日は、長時間にわたり感謝する。これをもって、第4回近江八幡市西の湖廻遊路整備推進会議を終了とする。